



この間、鏡を久しぶりで見た。なんだかしらがの爺さんが写っていた。人の生きる時間は短いというけれども、そのとおりなのだ。少年老い易く、学なり難しなのだ。ついこの間まではなんの不自由も感じることもなく、どんな社会の中にも飛び込んでいた。今も、なんの迷いもなく世界のどんな場所へも入ってゆく。危険な場合もあるだろうけれども、話し合えば分かり合える手ごたえはあるし、もし、狂気の相手でも、いままでのくいのない生きてきた道筋を考えると、まあ、納得できる。本当にそう思っているのだ。そう思っているながらも相変わらず今月も追い立てられるように走り回っている。なかなか気持ちと実態は同じようにはならないものだ。大きい意味での芯の通った思想というものがないのかもしれない。日本人の特質として共有しているすべてが場当たり的なにおいを持っている。

今月も密偵として郡山、筑波、土浦、水戸、松本と走り回り、29日からはまたバングラディシュへ行って職人たちを集めて便所つくりの講習会をやらねばならない。地図のない国だからまたまた地図作りからスタートだ。今度は気心の知れたおじさんたちと行くから問題はないはずなのだが、一緒に行く二人がそろって言うには日本のバングラ大使館でビザの手続きをしてくれるおねーちゃんが良くない。不親切、横暴、ぶっきらぼうと言うことだったが、いってみたら親切な人だった。これは多分にこちら側の出方によるのであって、一概に相手が悪いとは言いい切れない見本ではないかと思う。まあ、あの二人にも問題はあるのだ。そういうのと一緒に行くのだからちよっと疲れるかもしれないが、みんな一通りの問題を抱えているのは普通だからやむをえない。

そのうちの一人と休みの日に御岳山に行って買ったばかりのGPSのテストをしてくる。人工衛星からの電波を捉えて今いる場所がわかるというものだが、たしかに地図の上に自分たちの歩いたとおりに線がどんどんと引かれていくのは気持ちのいいものだ。それでもちよっとつらいのは常に水平に持っていなければならないことで、山道の曲がりくねった中を進んでいくのに常に片手に持った大き目の携帯電話のような機械を水平に持っていくのは疲れる。彼は朝、家を出るときに奥さんから「そんな風に歩いていて山から落ちないでね！」といわれたそうだが、その言葉の語感では多少、「男ってあほねー。」という感触を持っている。しかしあほでも何でもまだ地図のないところに行くと真っ白なところに線を引いてくるための準備は必要なのだ。先日はなんだか電波で距離を測る道具も買ったとメールが来たが、こうなったらノートも電子ノートにして我がボーイズはとことん電子化、ハイテク化した装備で身を固めバングラの田舎道を行くのだ、とは気負いつつ、どこかで機材が使えなくなる危険を考えると、前回のように、コンパスでいらんで歩測をしながら大学ノートに書き込んでいくということも同時にできるようにしておかなければならない。人工衛星の時代と伊能忠敬の時代がまだまだ混在しているのだ。電気というのは一瞬にして消えてしまうこともあるから、保険は常にかけておかなければならない。その点、わがオールドボーイズたちは場数を踏んでいるからそうは簡単に玉碎しないようにできている。電気製品なんて身につけたまま水に落ちたらおしまいなのだ。そんなときに少しもあわてることなく作業を続けることができることが、遠い地で働く男や女たちの最低条件だ。しかしまあ、あとあと数日をやらなければならない仕事にしたいのだが明日は長野に行かねばならん。まだまだじたばたしうだ。